

# 『国富論』における投機と過剰取引 — 調和的世界に対する確信とその揺らぎ —

立川潔(成城大学)

## I はじめに

『国富論』における投機(speculation), 冒険(adventure), さらに企画(project)については, これまで必ずしも十分な研究がなされてこなかったように思われる。管見のかぎり竹本洋会員の著作(『『国富論』を読む—ヴィジョンと現実』2005年)を例外として, 投機や冒険は, 慎慮ある行動, あるいは『国富論』の中核的概念である勤労と対立的な位置づけが与えられるとともに, 企画は「夢想的な(chimerical)」事業と等置されがちであった。したがって, それらは, 自然的自由の体系からすれば, 批判の対象でこそあれ, その体系に組み込まれるべき活動とは見做されてこなかったように思われる。

しかし, これらの活動は, いずれも不確実な将来に向けてリスクをとる行為である。そうであれば, ありのままの人間をふまえた自然的自由の体系においても不可避な活動ということになる。事実, スミスはそれらの活動の帰趨を洞察した上で自然的自由の体系を主張していたと思われる。この点を明らかにするのが, 本報告の第一の課題である。

第二の課題は『国富論』における人間観に関わる。スミスは, 不確実な将来に向けて行動する際, 大抵の人は「冷静な理性と経験による判断(the judgment of sober reason and experience)」(WN,p.563)に従うのではなく, 「自分自身の幸運についてのばかげた自惚れ(their absurd presumption in their own good fortune)」(WN,p.124)を抱き, 利得の機会を過大評価してしまうと見做していた。この楽観的な性向が分業と資本蓄積の体系である『国富論』の前提とされていたように思われる。そうであれば, 『国富論』の主題は, 「自分自身の幸運についてのばかげた自惚れ」などの「弱さと愚かさ」をもつありのままの人間が, 「見えざる手」に導かれて意図せずして「全般的富裕」を実現しうることを論証することにあつたといえよう。

しかし, この幸運についての自惚れが普遍的な性向であれば, それは公平な観察者を媒介とした自己規制が十分に作用しないことを意味するであろうし, そのような性向にもとづく活動は過剰になりがちであろう。そして, その認識は調和的な世界に対するスミスの確信を揺さぶることにもなると思われる。第三の課題は, その揺らぎを, 過剰取引(overtrading)に関するスミスの言説に探り, 金融危機を醸成する過剰投資を急速な資本蓄積に内在する傾向としてスミスが認識していたことを明らかにすることである。

## II 独占の解体, 財の安定供給, 自然価格の成立と投機

『国富論』の批判対象が, 排他的特権を国家から付与された独占会社にあつたことは周知のところであるが, その独占を解体させる主体を民間の冒険事業者(private adventurers)に期待していたことは必ずしも一般的な認識になっているとはいえないように思われる。そこで一例として, アジア地域との貿易における東インド会社の立場についてのスミスの認識を見てみよう。

「多くの競争者が存在する中で, ある市場で買い入れて別の市場で利潤をあげて売ること, 折々の需要の変動ばかりでなく, 競争の, つまりその需要に対して他の人々からなされそうな供給の, はるかに大きく頻繁な変動を監視すること, さらに, そうしたすべての状況に対して, 各種の財の数量も品質も, 技倆と判断力をもって適合させるということ, こうしたことは, たえず作戦が変化する一種の戦争なのであって, そ

れを巧く遂行するには、合資会社の取締役たちにいつまでも期待できないような警戒心と注意力の不断の行使なしにはほとんど不可能である。……東インド会社にまさる民間の冒険事業者の優れた警戒心と注意力のために、おそらく確実に、同社はまもなくこの貿易に嫌気がさすことになる。」(WN,p.755)

このように、スミスにとって、国家権力と結びついていない民間のアドヴェンチャーは、無思慮で無謀な商人であるどころか、「たえず作戦が変化する一種の戦争」に不可欠な「技倆と判断力」をもち、「優れた警戒心と注意力」を行使しうる存在であり、特権会社の独占を打破する主体として認識されていたのである。

外国貿易で取り扱われる財と同様に、価格変動の大きな財こそ「投機商人(speculative merchant)の操作」(WN,p.133)の対象であり、その代表的な財が穀物である。スミスが、「穀物取引の無制限無拘束の自由は、飢饉の悲惨に対する唯一の有効な予防策であるように、食糧不足の不便に対する最良の緩和策でもある」(WN,p.527)と主張することができたのは、周知のように、この「投機商人の操作」故であった。たとえば、不作から穀物価格の上昇を予想する穀物商人は、転売目的で穀物を買占める。その結果穀物価格は上昇し消費は抑制される。穀物商は期末に在庫を抱えれば損失を被るので、そうならないように安定的に穀物を市場に放出しようとする。要するに、穀物商人は「自分自身の利益を顧慮」していれば、収穫不足をできるかぎり年間を通じて均等化し、その弊害を緩和することで「国民の利益を意図せずして」実現する。かりに穀物商が価格を釣り上げ過ぎれば、期末に在庫を抱え損失を被る。「過度の貪欲(excess of avarice)のために最も損害を受けそうなのは穀物商自身」だから、取引は穀物商の「貪欲からの判断」に、つまり自由な取引に委ねることができるとスミスは主張した(WN,pp.524-27)。このように投機は価格変動の大きな財の安定供給に重要な役割を果たすと判断されていた。

それでは「長年営業している世間周知の事業部門(regular, established, and well-known branch of business)」(WN,p.130)ではどうであろうか。この事業部門の特徴は、価格変動が小さいということにある。たとえば、当時の織物産業について、スミスは「分業は1世紀前とほとんど同じ状態であり、用いられている機械もあまり違ってない」(WN,p.261)、「等量の勤労はつねに等量、あるいはほとんど等量の商品を生産する」(WN,p.132)と指摘している。さらに、「需要がもつぱら流行や気まぐれから生じるような製造業はたえず変わり続けるのであって、古くから営業している製造業(old established manufactures)と見做されるようになるまで長続きすることはめったにない。反対に、需要が主として慣習や必要から生じる製造業は、変化しづらく、同じ型や構造のものが何世紀にもわたって需要され続けることがある」とし、供給と需要の安定性を、古くから営業している製造業の特徴と見做している(WN,p.131)。このように長年営業している事業部門では、安定した需給によって価格変動が小さいため、スミスはひとまず「投機商人は活動しない」と主張する(WN,p.130)。それにもかかわらず、この部門においても、投機に重要な役割を期待していることは、次の引用から明らかであろう。

「すべての商売(trades)において、長年営業している業者(regular established traders)は、たとえ同業組合をつくっていなくても、自然に団結して利潤を引き上げようとするが、それをいつでも適切な水準に引き下げておく見込みがあるものとしては、投機冒険事業者(speculative adventurers)の折にふれての競争にまさるものはない。」(WN,p.736)

この事業部門では団結がより指向されやすいことを洞察していたスミスは、通常利潤を、したがって自然価格を成立させる働きの一つを投機冒険事業者による競争圧力に求めているのである。

以上の検討から自然的自由の体系はこうした投機の働きをふまえて主張されていたと言うことができよう。

### III 分業、資本蓄積と「過度の自惚れ」

スミスにおいて投機とは、市場心理をいち早く読み利ざやを獲得する思惑に限定されるものではない。特別利潤をめざしてリスクをとる行為は、新しい事業を起こしたり新しい生産方法を導入したりする資本蓄積をも含めて投機と認識されている。

「新しい製造業、新しい商業部門、あるいは農業上の新たな実践をはじめめることは、つねに投機であって、企画家(projector)はそこから特別利潤(extraordinary profits)を期待する。」(WN,p.131)

スミスは、投機、冒険、企画というリスクをとる行為を普遍的な人間の性向に根ざしたものと捉えていた。たとえば、スミスによれば、最初の植民地建設の目的は金銀の獲得にあったが、それを推進させたものは、「冷静な理性と経験による判断」ではなく「貪欲による判断」だという(WN,p.563)。理性的に考えれば、金銀が高価なのは、それらが稀少で、獲得するのに莫大な労働と費用を要するからである。また経験から、これまで開発された鉱山からは僅かな金銀しか発掘されてこなかったことも明白である(WN,p.563)。したがって、「冷静な理性と経験による判断」からは、金銀の鉱山開発は「最も割の合わない事業」であるという明白な結論が導かれる(WN,p.562)。それにもかかわらず、鉱山開発は行なわれる。留意すべきことは、「冷静な理性と経験による判断」に従わないのは、実際に鉱山開発にたずさわった少数者に限ったことではなく、自らの幸運を過大評価する普遍的な人間の性向に起因するというスミスの認識である。

「大抵の人が自分自身の能力について持っている思い上がった自負心は、あらゆる時代の哲学者や道徳家によって認められている昔からの悪弊である。だが大抵の人がもっている自分自身の幸運についてのばかげた自惚れはそれほど注意をひいてこなかった。しかし、このほうが……いっそう普遍的である(still more universal)。……誰もが利得の機会を多かれ少なかれ過大評価し、また大抵の人が損失の機会を過小評価するものであって、一応の健康と気力のある人で、損失の機会を過大評価する人はめったにいない。」(WN,pp.124-25)

「利得の機会が自然に過大評価されるということは、富籤がどこでも成功していることから知ることができる」とスミスはいう。「完全に公平な富籤、すなわち利得全体が損失全体を埋め合わせるような富籤は、かつて存在したこともないし、今後も存在しない」(WN,p.125)。これは「冷静な理性と経験」から帰結する結論であろう。しかし、自らの幸運を過大評価する性向から、富籤は買われる。たとえば、「法律という富籤(the lottery of the law)」についてスミスは次のようにいう。法学の勉強をしても法律家として自活できるのはせいぜい20人に1人である。しかも空くじを引いた人々が失ったものを成功した1人が獲得できるわけではない。つまり「法律という富籤は、完全に公平な富籤にはほど遠く、他の多くの知的で名誉ある専門職と同じように、金銭的利得の点では、明らかに報われない」(WN,p.123)。それでも人々は「法律という富籤」を買う。「海上勤務という富籤」、「陸軍という富籤」もある(WN,p.126)。聖職者になることすら「教会という富籤」(WN,p.148)を買うことだとスミスは看破する。つまり、このような自らの幸運を過大評価する楽観的な性向が、様々な職業を、また新たな事業を生み出すのであり、分業と資本蓄積の体系である『国富論』の前提

とされていたといえよう。ここでケインズの言説、「企業が主としてそれを起こした人々またはその友人や協力者によって所有されていた古い時代には、投資は、一生の仕事として事業に乗り出す、多血質で (sanguine temperament) 建設的な衝動に駆られた人々がふんだんにいたことに依存しており、実際に期待利潤の正確な計算に依存するものではなかった。事業はある程度富籤のようなものであった」(GT,p.150)を想起してもあながち見当違いではなかろう。

さて、「冷静な理性と経験」に背反する「自分自身の幸運についてのばかげた自惚れ」は、『道徳感情論』で指摘されている「想像力の偏見(the prejudices of the imagination)」(TMS,p.52)の一つといえよう。この「想像力の偏見」によって、大抵の人は、富貴な人々の生活を至福な状態と等置してしまう。「理性と経験は我々にその反対を告げる」(TMS,p.52), すなわち「小屋の中よりも宮殿の中のほうが、自分たちの食欲がすすむとか、熟睡できるとか想像しているのだろうか。その反対であることが、極めてしばしば観察されてきたし、しかも観察されることがなかったとしても、それは極めて明白であって知らない者はいない」(TMS,p.50)。それにもかかわらず、「理性と経験」に反して富貴は希求される。この「想像力の偏見」が社会秩序を維持する上で、さらに勤労と貯蓄を促し「全般的富裕」を導く上で、重要な動因とミスが認めていたことは周知のところであろう。結果という偶然が行為者に対する感謝と憤慨に影響を及ぼすという文脈で語られた「人間の弱さと愚かさの中にさえ神の英知と善意が認められる」(TMS,p.106)との言説は、この「想像力の偏見」についても妥当するであろう。

「人間の弱さと愚かさの中にさえ神の英知が認められる」との言説は、第6版第6部第3章「自己規制について」においても表明されるが(TMS,p.253), そこでは「過度の自己賞賛(excessive self-admiration)に基づいた過度の自惚れ(excessive presumption)」を抱いている人々の企業(enterprise)―「冷静な人(a more sober mind)がけっして考えつかなかっただろう事業(undertakings)」―が、最初の成功という幸運によって、一般大衆にとどまらず、「公平な観察者」(TMS,p.252)からも賞賛されてしまうことが指摘されている。つまり公平な観察者を介した自己規制は十分になされず、「当初の優れた能力と成功に導く企業心(successful enterprise)が、最後には必然的に破産と破滅に至る事業へとしばしば誘う」(TMS,p.252)のであり、IVで検討する過剰取引を誘うことにもなる。しかし、それにもかかわらず、「世間での大成功」は「ある程度この過度の自己賞賛なしに獲得できた例はまずない」のであり、とくにそれが政治的偉業である場合、「成功に対する我々の賞賛は、富と地位に対する我々の尊敬と同じ原理に基づいているのであり、身分の区別と社会の秩序を確立するのに同じように必要」との認識が示され、そこに「神の英知」が読み込まれる(TMS,p.253)。ここに「過度の自惚れ」という「人間の弱さと愚かさ」が調和的世界を、分業と資本蓄積の進展を支えているとのスミスの確信を見ることができよう。

#### IV 過剰取引と調和的世界に対する確信の揺らぎ

さて、調和的世界に対するスミスの確信は揺るぎのないものであったであろうか。周知のように富貴な人々の生活状態を至福の状態と等置する「想像力の偏見」がもたらす道徳的腐敗は、『道徳感情論』第6版で強調されるに至るが、『国富論』では、同じ「人間の弱さと愚かさ」の現われである「ばかげた自惚れ」が勤労の自然的均衡を崩すことが指摘される。スミスは、先に述べた鉦山開発に関する文脈で、「ほとんどすべての人々が自分自身の幸運に対して抱いているばかげた自信のために、ほんの僅かでも成功の見込みがあると、過大な割合の資本が自然にそこに行ってしまうがち」(WN,p.562)であることを指摘する。この指摘は、「ほんの僅かでも成功の見込みがある」場合には過剰な投資がなされる一般的な傾向をスミスが認識していたことを示しているといえよう。この点で取り上げたいのは、『国富論』における「貨幣の不

足」と紙幣の過剰発行がもたらす信用不安に関するスミスの言説である。

『国富論』では「貨幣の不足」についての不満が、スコットランド、北アメリカ植民地、西インド植民地で生じていることが指摘されている。ここで問題としたいのは、スミスがこの事態をどのように把握したかであって、その理論の妥当性ではない。慢性的な入超による金銀貨の流出が貨幣の不足と信用不安の原因であるとの見解を否定するスミスは、過剰取引(過剰投資)が紙幣の過剰流通(過剰信用供与)を導き、「貨幣の不足」と信用不安を現出させると主張する。

1762年からの為替危機、72年のエア銀行倒産による金融恐慌を経験したスミスは、イングランドとスコットランドでの紙幣の過剰流通の根本原因を「連合王国の両地方の幾人かの大胆な企画家(some bold projectors)の過剰取引」(WN,p.304)に求めている。スミスは、紙幣の過剰発行を防止するために小額銀行券の発行禁止、選択条項の禁止という政策を、さらに「冷静な人々(sober people)」への貸付を抑制してしまふ「浪費家や企画家」への貸付を防ぐために市場利子率を僅かに上回る法定利子率の設定を提言している(WN,p.357)。しかし、過剰取引を引き起こす原因を「自分自身の幸運についてのばかげた自惚れ」という普遍的な性向に求めていたスミスにとって、こうした政策によって、信用不安を封じ込められるとは確信しえなかったのではなかろうか。次の引用はそのことを示しているように思われる。

「貨幣の不足に対する不満は、必ずしもつねに軽率な浪費家だけに限られるわけではない。それは、ときには、商業都市全体と、その近隣農村の全般にわたることもある。過剰取引こそが貨幣の不足に対する不満の一般的原因である。冷静な人々(sober men)でも、企画が自分たちの資本と釣り合わなかったりすれば、支出が収入と釣り合わなかった浪費家と同じように、貨幣を買う手段も借りる信用もないということになりがちである。企画が実を結ばないうちに、資本はなくなり、それとともに信用も失われる。……商売の利潤がたまたま通常よりも大きいときには、大小いずれの業者の間でも、過剰取引が一般的な過ちとなるのである。」(WN,pp.437-38)

このようにスミスは、利潤が通常利潤を上回るような活況を呈している経済では、冷静な業者でも自らの資本と釣り合わない企画に走りがちになることを認識していた。そうであれば上記の政策によって金融市場を制御しうるものではないことをスミスは認識していたというべきであろう。このことは植民地における「貨幣の不足」についての言説をみればより明瞭となる。

スミスは、「より多くの資本を自らの土地の改良に用いていつも利潤をあげること」が可能な北アメリカ植民地では、金銀貨という「死んだ資財」を「商売道具や服地や各種の家具や、自分たちの定住地やプランテーションの建設と拡大に必要な鉄製品」という「活動的で生産的な資財」に転換し事業の拡大をはかろうとする強い傾向が、紙幣の過剰発行と金銀の駆逐を生み出しているとして次のように主張する。

「紙幣が過剰になれば、植民地の国内取引から必ず金銀は駆逐されるのであって、それは紙幣の過剰がスコットランドの大半の国内取引から金銀を駆逐したのと同じ理由のためである。そしてどちらの国においても、このような紙幣の過剰を引き起こしたのは、国民の貧困ではなくて、国民の企業心に富んだ企画精神(the enterprising and projecting spirit of the people)、すなわち手に入るすべての資財を活動的で生産的な資財として使用しようとする願望なのである。」(WN,p.941)

ここで、スミスが、「アメリカの植民地の最初の建設、あるいは現在の偉観」に対するヨーロッパの政策の唯一の貢献を「活動的で企業心に富んだ創設者(their active and enterprising founders)の教育と偉大な識見」

に求めていたことを想起したい(WN,p.590)。アメリカ植民地を開発した企業心, 不断の生産資本の拡大願望こそが, 紙幣の過剰発行と信用不安を引き起こすとスミスは捉えていたのである。

さらに, スミスは西インド植民地から本国への債務返済の困難さと不規則さについて, それは赤字額の大小ではなく, 「プランターたちが抱いてきた過剰取引の誘惑, すなわち自らの資本の大きさにふさわしくないほどの広大な荒地に定住地とプランテーションを作りたいという誘惑の大小に」比例していると主張する。七年戦争によって「グレネイダ, トバゴ, セント・ヴィンセント, ドミニカが新たに獲得されたために, この種の投機のための新しい余地が開かれ, これらの島々からの返済は近年……不規則で不確実になった」というのである(WN,pp.942-43)。投機が勤労と対立するものでないことはもはや明らかであろう。むしろ過剰取引は資本の急速な蓄積に内在した傾向と認識されている。スミスにとって, 金融恐慌を引き起こしかねない正貨不足による支払い不能は, 「不要な過度の企業心(their unnecessary and excessive enterprise)の結果」であり, 「途方もなく富裕になろうという渴望が強すぎる」結果なのである(WN,p.943)。

このようにスミスは過剰取引とそれがもたらす信用不安を急速な資本蓄積それ自体に内在する問題として認識していたのであり, このことは調和的な世界に対するスミスの確信が必ずしも揺るぎないものではなかったことを示しているのではないだろうか。

#### 【引用文献】

WN: Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1976.

TMS: Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1976.

GT: Keynes, John Maynard, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol.VII, London, 1973.